

「生涯現役」にこだわり、会社を退職してアジアに向かった人がある。畠中則和さん(52)は松下電器産業で中国事業の担当や台湾法人の取締役を歴任した後、日台企業の事業コンサルタントとして独立した。かつて故・松下幸之助氏の通訳も務めた畠中さん。幸之助氏が大事にしていた「共存共栄」という言葉を胸に、日台の企業交流に奔走する。

畠中さんは昨年七月、二十九年間勤めた松下を早期退職した。残っていたれば北京法人にという話もあった。けれども赴任期間の三十四年が過ぎれば、すぐに定年を迎えてしまう。「会社に育ててもらった恩は大事に思うが、生涯現役にこだわろうと思った」と一念発起。退職した

一カ月後には、台湾でコンサルティング会社「則和企業管理顧問」を設立した。設立当時、顧客はゼロ。今では十一の企業などに顧問役としてアドバイスする。台北

市内のオフィスに自分の机はない。顧問先を飛び回り、その場で顧客とともに仕事をすすめる。顧客は幅広く、日台間の窓口である日本交流協会台北事務所の貿易投資顧問から、

育った。高校時代に親しかった教師の助言もあり、大学では中国語を専攻。在学中の一九七二年には田中角栄元首相が訪中、日中国交が回復している。就職活動では松下の面接試験で「海外で事業がやりたいんです」。目標をはっきりと思い描いていた。入社して二年目に海外研修生に選ばれ、台湾松下に出向。初めての海外だった。当時の

当した。一九七九年と八〇年に、松下幸之助氏が中国を視察した際には、通訳として同行。戦前に松下の乾電池を生産していた工場を訪れたとき「畠中くん、これはうちの電池やなあ」と話しかけられた。「戦争を経てまあ、松下の技術が受け継がれていたことに感動しているようでした。あのときの相談役のうれしそうな顔は一生忘れません」と

現役ニだわり、台湾で起業

私立美術館の経営顧問までこなす。台湾の經濟部(経済省)のシンクタンクからの依頼で、経営者育成セミナーの講師も年内に始める。

畠中さんは奈良県で生まれ



台湾では「国際牌」(ナショナルブランド)の家電製品が圧倒的な強みを発揮し、松下の海外事業をけん引していたという。「あの時台湾に駐在していた先輩たちは一日中働いているくらい、パワフルな人ばかりだった。自分の将来像を台湾で描きました」と懐かしむ。

二年間の研修を経て、日本へ帰国した後は中国事業を担

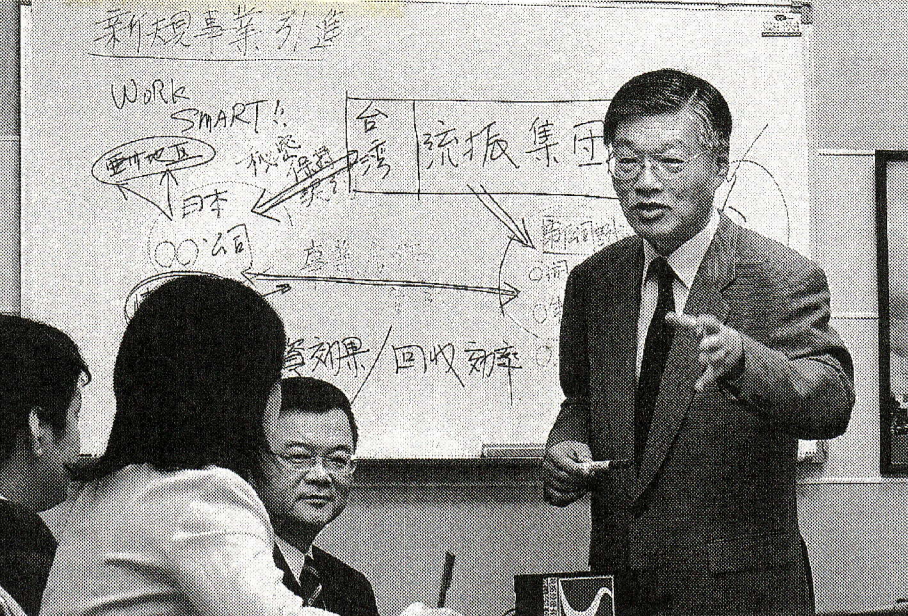
早期退職を活用 企業に経営指導

松下での経験 基に

顧問先の台湾企業、統振もその一つ。携帯電話用のバッテリーなどを製造する同社は、多角的な事業展開を考え、日本企業との提携を模索している。畠中さんは週に一回、半日以上かけて会議を続けている。「(松下幸之助)相談役の言葉で言うたら『共存共栄』ですな。日本と台湾、お互いに勝つ関係を作っていきたい」と張り切っている。

唯一の不満は、顧問先に関西の企業が少ないこと。大阪と神戸には中小企業が多いのに、悔しい思いをしている。それでも「台湾には、自分が与えられた使命がある気がする」と信じ、七十歳までは現役で働き続けるといふ。ゆっくりと、着実に、大輪の花を咲かせるつもりだ。

(大阪経済部 関優子)



取引先の台湾企業と打ち合わせをする畠中さん(台北県汐止市)＝撮影・小川望
松下幸之助氏の通訳を務めていたころの畠中さん(大阪府門真市の松下本社)＝畠中さん提供



振り返る。その後は中国・広州の事務所長を経験し、二度にわたって台湾松下に出向した。三度目の台湾行きを命じられたときは、そこで骨をうづめる覚悟だったという。現地の従業員が「畠中さんは私たちのことをよく分かっているから」と相談にやってくることも多かった。

だからこそ日本に帰国が決まったとき、すぐに起業を決心した。「松下が教えてくれ